

杜甫「春望」という古典教材

堀 誠

現在、日本の学校教育の場は、改訂された新学習指導要領（小・中学校：2008（平成20）年，高等学校・特別支援学校：2009（平成21）年）の実施・進行過程にある。2011（平成23）年度には小・中学校が、2012（平成24）年度には中学校がその教科書の一斉使用を開始し，高等学校は，2013（平成25）年度から学年進行で新たな教科書の使用が開始されている。今次の改訂は，社会を生きる子どもたちの教育的充実をはかることを趣旨とし，「伝統文化の教育」が重視されている。この方針は，2006（平成18）年に六十年ぶりに改定された「教育基本法」の前文第二段落に，

我々は，この理想を実現するため，個人の尊厳を重んじ，真理と正義を希求し，公共の精神を尊び，豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期するとともに，伝統を継承し，新しい文化の創造を目指す教育を推進する。

同じく第二条（教育の目標）第五項において，

伝統と文化を尊重し，それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに，他国を尊重し，国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

と明記される。これに基づいて，国語科に関していえば，小学校高学年に漢文の学習が盛りこまれ，高等学校では総合的な言語能力を育成する「国語総合」が共通必修科目となり，高校在学者の全員が古典教材を学ぶことになった。しかし，こうした方針の策定に先んじて2007（平成19）年には，国立教育政策研究所が全国規模で実施した教育課程実施状況調査に関して「古文・漢文嫌いの高校生は七割以上で，物理・数学，外国語を押さえてトップである」と報告していた。この数字は非常にショッキングなもので，これをどう受けとめて国語教育，とりわけ古典教育を考えればよいのか，困惑を覚えた向きも少なくないであろう。

このような古典学習の環境にあって，いかなる作品が教材化され，いかに学習されているか。昨2012年は，中国・盛唐時代の712年に杜甫が誕生してから1300年の記念すべき年回りに当たっていたが，彼の詩篇の中でとりわけ人口に膾炙するのが「春望」（五言律詩）でもある。いわゆる「古典」の漢文教材として，この杜甫「春望」がいかに教科書に採られているか。その教材としての特性をめぐって国語教育的な観点から考察を試みたい。杜甫「春望」をとらえる所以は後述に自ずと明らかになろう。

* 小学校教科書

『小学校学習指導要領』（2008年3月）第2章「各教科」・第2節「国語」・第2「各学年の目標及び内容」における〔第5学年及び第6学年〕の2「内容」〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕

(1) ア「伝統的な言語文化に関する事項」で、

(ア) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。(傍線筆者。以下同じ。)

(イ) 古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

を挙げ、『小学校学習指導要領解説国語編』（2008年6月）第1章「総説」3「国語科改訂の要点」(5)「伝統的な言語文化に関する指導の重視」においては、「例えば、低学年では昔話や神話・伝承など、中学年では易しい文語調の短歌や俳句、慣用句や故事成語、高学年では古文・漢文などを取り上げている。」と低・中・高の学年間の展開を示している。この『小学校学習指導要領』は、2011年度から全面実施され、ここに小学校高学年での音読や暗唱を重視した「易しい古文や漢詩・漢文」による古典の学習環境が生まれたが、その高学年の教科書を具体的に検討してみると、漢文に関しては、五年ないし六年の一学年のみで学ばせるものと、五年・六年の二学年にわたって学習させるものとに三分される。そこには、いかなる漢文の教材が採られているか。

小学校の教科書五種の中で、五年生で一気に漢詩・漢文を学ばせるのが教育出版「ひろがる言葉 小学国語5上」である。「三 日本語のひびきを味わう〔文化〕」の「漢文に親しむ」で、「春曉」（孟浩然）・「静夜思」（李白）・「故きを温ねて新しきを知る」（『論語』）・「心焉に在らざれば視れども見えず 聴けども聞こえず 食らえども其の味を知らず」（『大学』）によって漢文ならびに日本人の受容を丹念に導入し、「漢文を読もう」では、「春夜」（蘇軾）・「江南春」（杜牧）・「山亭夏日」（高駢）の三首、『論語』から「学びて時に之を習う、亦た説ばしからずや。朋の遠方より来たるあり、亦た楽しからずや。」「吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従いて矩を踰えず。」を加えて重層化させる。

これに対して、六年で学ばせるのが東京書籍「新しい国語六上」である。〔日本の言の葉〕「漢文を読んでみよう」で、「百聞は一見にしかず」という言葉から「漢文」について簡明に導入し、「声に出して読もう」において、「一を聞きて以つて十を知る。」「子曰はく、「故きを温めて新しきを知らば、以つて師となるべし。」と。』（『論語』）、「一に曰はく、和を以つて貴しとし、さかふること無きをむねとせよ。」（聖徳太子「十七条の憲法」）・「春曉」（孟浩然）で構成している。

また、学校図書は「小学校国語六年上」で漢文を採り上げるが、「漢詩を味わおう」において「歳月は人を待たず」という言葉の引用の例から「漢詩の名句」に展開させ、「胡隱君を尋ぬ」（高啓）の一首を扱うのみである。

上記三社に対して、五年・六年の二学年にわたって学習させるのが光村図書と三省堂である。光村図書は「国語五 銀河」の「声に出して読もう 論語」で、「子曰はく、「己の欲せざる所は、人に

施すこと勿れ。」と。」「子曰はく、「過ちて改めざる、是を過ちと謂ふ。」と。」「子曰はく、「学びて思はざれば、則ち罔し。思ひて学ばざれば、則ち殆し。」と。」を学習し、「国語六 創造」〔季節の言葉〕「秋は人恋し」において、「静夜思」（李白）を用意するが、各学年での導入文は特に用意されず、直にテキストが提示される。

また、一学年二冊（本編・資料編）の構成をとる三省堂は、五年の資料編「小学生の 国語五年学びを広げる」の「〔読書の時間〕漢詩」に「絶句」（杜甫）・「春暁」（孟浩然）の漢詩二首を用意し、六年の本編「小学生の国語六年」の「声に出して読もう—漢文〔言語文化〕」で「漢文」について導入し、『論語』から社名ゆかりの「吾れ日に三たび吾が身を省る。」や「故きを温めて新しきを知る、以て師と為るべし。」「仁者は必ず勇有り。勇者は必ずしも仁有らず。」「己の欲せざる所は人に施すこと勿れ。」を学ぶ。ただし、本編に対して資料編の実質的な扱いは微妙にして不透明な状況にあらう。

扱われる教材としては『論語』が少なくなく、漢詩は特定の作品への著しい偏向性は認められないことが確認される。その多くが中学校および高等学校の教材としても再び採られるものであり、将来への導入的な先行学習といった意味合いが強いように思われる¹。杜甫の詩作に着眼してみれば、辛うじて「絶句」の一首を一社の教科書に認めるのみで、律詩たる「春望」は小学校教科書には採用されていないことが分かる。

二社＝「静夜思」（李白）：教出・光村、「春暁」（孟浩然）：東書・三省〔資料編〕

一社＝「胡隠君を尋ぬ」（高啓）…学図、「春夜」（蘇軾）：教出、「江南春」（杜牧）：教出、「山亭夏日」（高駢）：教出、「絶句」（杜甫）：三省〔資料編〕

〔教出：教育出版、光村：光村図書、東書：東京書籍、三省：三省堂、学図：学校図書〕

ところで、この国語科教科書的一方で特異な存在であるのは、2004年に構造改革特区「世田谷『日本語』教育特区」に認定された世田谷区の小学校「日本語」教材である。同区教育委員会が編集刊行する「日本語一・二年」「日本語三・四年」「日本語五・六年」の三冊構成（2007年3月刊）で、一年次から「日本語の響きやりズムを楽しもう」のタイトルで『論語』と漢詩を適宜学習する。漢詩は都合二十五首が採り上げられる。〈…〉は学年ごとの掲載箇所。

〔一年〕二首＝〈2〉「胡隠君を尋ぬ」高啓・「絶句」杜甫

〔二年〕三首＝〈2〉「春暁」孟浩然、〈7〉「竹里館」王維、〈11〉「静夜思」李白

〔三年〕五首＝〈2〉「江南の春」杜牧、〈4〉「客中初夏」司馬光、〈6〉「秋風の引」劉禹錫・「独り敬亭山に坐す」李白、〈10〉「鹿柴」王維

〔四年〕五首＝〈2〉「元二の安西に使いするを送る」王維、〈6〉「早に白帝城を發す」李白、〈9〉「廬山の瀑布を望む」李白、〈11〉「山行」杜牧・「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」李白

〔五年〕五首＝〈3〉「偶成」朱熹・「秋日」耿湋・「芙蓉楼にて辛漸を送る」王昌齡、〈11〉「江亭」杜甫・「香炉峰下、新たに山居を卜し、草堂初めて成り、偶たま東壁に題す」白居易

〔六年〕五首＝〈3〉「楓橋夜泊」張繼・「晁卿衡を哭す」李白、〈6〉「春望」杜甫、〈10〉「桂林莊雜詠」
広瀬淡窓・「春暮」良寛

杜甫の関係では、一年に「絶句」、五年に「江亭」、六年に「春望」の都合三首を採用し（最多は李白の六首）、そのうち「絶句」のみが小学校国語科教科書の一社と重なる。小学校国語科教科書で採り上げる詩篇の数が多くても三首であることからすれば、「日本語」の掲載数は『論語』の章段²とも相俟って桁違いで通常の国語の学習に増して古典への接近が積極的にはかられていることを指摘できる。かつ律詩を含めた採録は、小学校国語科教科書に共通する絶句中心的な姿勢を脱したものであると評価できよう。この点には特に注意しておきたい。

＊ ＊ 中学校教科書

『中学校学習指導要領』（2008年3月）第2章「各教科」第1節「国語」第2「各学年の目標及び内容」の〔第1学年〕2「内容」における〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕（1）ア「伝統的な言語文化に関する事項」では、

（ア）文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。

（イ）古典には様々な種類の作品があることを知ること。

という小学校の学習を承けた導入的な内容が盛られ、〔第2学年〕からは「古文や漢文」という文言は消えて「古典」という語に集約され、

（ア）作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと。

（イ）古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること。

と「古典の世界」に「触れる」ことを踏まえて「楽しむこと」を説き、〔第3学年〕では、

（ア）歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと。

（イ）古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書くこと。

と「古典の世界」に「親しむこと」とその活用にいたる指導への展開を示す³。

2012年度から中学校の新学習指導要領による教育が始まっているが、その五種類の中学校国語科教科書の第一学年では、いずれも故事成語による漢文の導入がなされる。その教材は、五社ともに「矛盾」（出典は『韓非子』「難一」篇）を採用し、一社が「五十歩百歩」との二篇で構成する。その他の故事成語を例挙するものもあるが、この故事成語による導入と同時に、第二学年、第三学年の教材にあっては、中国文学の精華とも称される「唐詩」の代表的な詩篇による漢詩教材を採用している。ただし、その配当は、二年生で扱うか、三年生で扱うかに二分される。二年生の教材とするのは、光村図書・東京書籍・三省堂の三社であり、三年生の教材とするのは教育出版・学校図書の二社である。順にいかなる詩人の、いかなる詩篇を採用しているのかを具体的に示しておきたい。

光村図書「国語2」「5いにしえの心を訪ねる」「漢詩・解説」は、「漢詩の風景」と「律詩について」で構成する。石川忠久の書きおろしになる「漢詩の風景」は、旧学習指導要領でも用いられていた漢

詩の教材である。今次の「国語2」では従来の詩篇四首から日本の広瀬淡窓「桂林荘雜詠 諸生に示す」を削減して、「春暁」（孟浩然）・「絶句」（杜甫）・「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」（李白）の中国の詩篇三首を取り上げて解釈・説明を展開する。と同時に、三首とも絶句であることから、「律詩について」を用意し、「春望」（杜甫）を取り上げ、唐詩の理解を深化する配慮をはらっている。

東京書籍「新しい国語2」の「漢詩」では、「春望」（杜甫）・「黄鶴楼にて、孟浩然の広陵に之くを送る」（李白）の二首により漢詩の世界を紹介し、情景や心情をとらえ、表現の特徴を学びながら漢詩の世界を楽しむ。「資料編」には日原傳による書きおろしの「漢詩の世界」を用意して、漢詩を読み、漢詩を味わう発展な学習を意図している。

三省堂「中学生の国語二年」本編冒頭の「伝統的な言語文化一言語文化を楽しむ」「漢詩の世界」は、「中学生の国語一年」本編冒頭の「伝統的な言語文化一言語文化にふれる」の「声に出して、さまざまな作品を読もう」における「春暁」（孟浩然）の学習を導入として、「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」（李白）・「春望」（杜甫）・「絶句」（杜甫）という李杜の三首を通して、「情景や作者の心情などを想像しながら、朗読を工夫して、その世界を味わおう。」としている。加えて、新たに学年ごとに別冊「学びを広げる〔資料編〕」を設け、「言語文化篇」「詩の音読・暗唱」において、一年で「早に白帝城を発す」（李白）、二年で「鹿柴」（王維）、三年で「江南の春」（杜牧）を発展な音読・暗唱教材に採用している。

三年生で漢詩教材を登場させる二社の中で、学校図書「中学校国語3」の「4 今に向かって」「漢詩（漢文）」では、「春望」（杜甫）・「元二の安西に使ひするを送る」（王維）・「静夜の思ひ」（李白）」の三篇により、詩の展開や情景、心情を読み取り、また繰り返し朗読することを試みているが、その導入の方法は特徴的で、そうした詩歌に日本人が出会い、それを受容し、あるいは影響を受けてきた事実を積極的にとらえた展開を企図するものになっている。

教育出版「伝え合う言葉 中学国語3」の「読むこと」「【伝統文化】春の山河（漢詩）」では、「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」（李白）・「春望」（杜甫）という李杜の二首を取り上げ、「みちしるべ—学習の手引き」に、形式を知り、言葉の響きやリズムなどに注意して暗唱する、語句の効果的な使い方、表現上の工夫に注意して読む、漢詩にみられる自然や人間に対する感じ方について感想を発表するとの要点を示し、「漢詩について」で絶句、律詩、起承転結、韻を踏む（押韻する）、対句といった基本概念を紹介する一方、李杜をめぐるコラム「【李白と杜甫】」を用意する（後述）。

以上を要するに、中学国語科教材に採られるのは、五詩人・九首の詩篇に過ぎない。

五社＝「春望」（杜甫）光村2年・東書2年・三省2年・学図3年・教出3年

四社＝「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」（李白）光村2年・東書2年・三省2年・教出3年

二社＝「絶句」（杜甫）光村2年・三省2年、「春暁」（孟浩然）光村2年・三省1年

一社＝「元二の安西に使ひするを送る」（王維）学図3年、「静夜の思ひ」（李白）」学図3年、「早に白帝城を発す」（李白）三省1年（別冊）、「鹿柴」（王維）三省2年（別冊）、「江南の春」（杜

牧)」三省3年（別冊）

〔光村：光村図書，東書：東京書籍，三省：三省堂，学図：学校図書，教出：教育出版〕

杜甫に着目してみれば、「絶句」を含めて他詩人の詩篇がすべて絶句である中で、「春望」は唯一の律詩であるとともに、五社全社が採用する安定的教材の位置を占めていることが明らかとなる⁴。

国破山河在（国破れて山河在り）

城春草木深（城春にして草木深し）

感時花濺淚（時に感じては花にも涙を濺ぎ）

恨別鳥心驚（別れを恨んでは鳥にも心を驚ろかす）

烽火連三月（烽火 三月に連なり）

家書抵萬金（家書 萬金に^{あた}抵る）

白頭搔更短（白頭 搔けば更に短く）

渾欲不勝簪（渾^{すべ}て簪に勝へざらんと欲す）

漢詩という中国古典に対してより積極的にアプローチする中学教材において、この詩篇が採択されるのは、戦乱による破壊と自然のたくましさのコントラスト、そして日本における詩的な共感とその文学的な受容が基底に働くものと推測される。2011年に発生した東日本大震災の経験を通して、杜甫の「春望」という詩篇が演じた役割は大きく、一つの中国詩歌のイメージを日本の風土に架橋するものとして、その教材を活かすことは必須であると考えられる。

*** 高等学校教科書「国語総合」

2013年度にスタートした新しい高等学校学習指導要領下で「共通必修科目」となった「国語総合」は、「教科の内容の基本となるものを全面的に受けた総合的な言語能力を育成する科目である」と意味づけられている。選択科目である「国語表現」・「現代文A」・「現代文B」・「古典A」・「古典B」の5科目は、原則として「国語総合」を履修した後に履修することになる。『高等学校学習指導要領』（2009年3月）第2章「各学科に共通する各教科」第1節「国語」第2款「各科目」第1「国語総合」における（4）「内容のC（筆者注…「読むこと」）に関する指導については、次の事項に配慮するものとする。」の中で、

ア 古典を教材とした授業時数と近代以降の文章を教材とした授業時数との割合は、おおむね同等とすることを目安として、生徒の実態に応じて適切に定めること。なお、古典における古文と漢文との割合は、一方に偏らないようにすること。

イ 文章を読み深めるため、音読、朗読、暗唱などを取り入れること。

というように、「国語総合」における「古典」を構成する「古文」と「漢文」との割合について明示し、「漢文」の未履修を含めたアンバランスな履修状況を否定している⁵。

この「国語総合」の共通必修科目化は今後の改訂の一つの目玉となるが、それがもつ意味として重要なのは、高等学校での「古典」の学習が必須となることにある。したがって、多様化する教学環

境の下で教材自体の硬軟の幅をもたせる、教材数を精選する等々の方策による現実的な対応も必要となろう。中・高一貫教育の環境も現実化する中で、新教科書にはいかなる詩篇が採られているか。作品の選択や配置にも関心がもたれるところである。

「国語総合」の教科書は、九社、都合二十三種類のテキストが検定刊行される。教材として採用された詩篇の数は、三十六首⁶。まず出版社ごとに教科書名を記し、括弧内にその略号を示しておく。筑摩書房「精選国語総合」（筑摩①）・「国語総合」（筑摩②），明治書院「高等学校 国語総合」（明書①）・「精選国語総合」（現代文編，古典編）（明書②），教育出版「国語総合」（教育①）・「新編国語総合 言葉の世界へ」（教育②），大修館書店「国語総合」（現代文編，古典編）（大修①）・「精選国語総合」（大修②）・「新編国語総合」（大修③），第一学習社「新訂国語総合」（現代文編，古典編）（第一①）・「国語総合」（第一②）・「標準国語総合」（第一③）・「新編国語総合」（第一④），東京書籍「新編国語総合」（東書①）・「精選国語総合」（東書②）・「国語総合」（現代文編，古典編）（東書③），三省堂「高等学校国語総合」（現代文編，古典編）（三省①）・「精選国語総合」（三省②）・「明解国語総合」（三省③），数研出版「高等学校国語総合」（数研①）・「国語総合」（現代文編，古典編）（数研②），桐原書店「国語総合」（桐原①）・「探求国語総合」（現代文・表現編，古典編）（桐原②）。

九社二十一種＝「送元二使安西」（王維）…筑摩①②・第一①②③④・数研①②・桐原①②・三省①②・東書②③・明書①②・教育①②・大修①②③

七社十六種＝「江雪」（柳宗元）…筑摩①②・東書①②③・大修①②③・三省①②・明書①②・教育①②，第一①②

七社十三種＝「涼州詞」（王翰）…三省①②③・数研①②・桐原①②・教育①・筑摩①②・東書②③・大修①

七社十一種＝「登鸛鵲樓」（王之渙）…数研①②・桐原①②・教育①・三省①・第一①②・東書②③・大修①②

六社十五種＝「春望」（杜甫）…筑摩①②・明書①②・三省①②・東書②③・大修①②③・第一①②③④，「静夜思」（李白）…筑摩①②・三省①②③・明書①②・数研①②・大修①③・東書③・第一①②③④

六社十三種＝「春曉」（孟浩然）…筑摩①②・東書①②③・三省①②・明書①②・教育②・第一③④，大修③

五社十一種＝「八月十五日夜，禁中独直，对月憶元九」（白居易）…桐原①②・明書①②・三省堂②・筑摩①②・東書②③・第一①②

五社十種＝「香炉峰下，新卜山居，草堂初成，偶題東壁」（白居易）…三省①③・数研①②・大修①②・教育①②・第一③④

三社六種＝「絶句」（杜甫）筑摩①②・桐原①②・大修①②，「山行」（杜牧）…東書①・大修①②③・数研①②，「早發白帝城」（李白）…教育①②・桐原①②・数研①②

三社五種＝「江南春」（杜牧）…三省①③・教育①・第一①②，

三社四種＝「山亭夏日」（高駢）筑摩①・明書①②・東書①，「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」（李白）三省②・第一①②・東書②

二社五種＝「月夜」（杜甫）…三省③・数研①②・第一①②

二社三種＝「登高」（杜甫）…数研①②・三省①，「送友人」（李白）…筑摩①②・桐原②，「秋夜寄丘二十二員外」（韋應物）…筑摩①②・大修③，

二社二種＝「登岳陽樓」（杜甫）…桐原②・三省②

一社二種＝「旅夜書懷」（杜甫）…教育①②，「春夜洛城聞笛」（李白）…大修①②，「楓橋夜泊」（張繼）…桐原①②，「望廬山瀑布」（李白）…東書②③，

一社一種＝「春夜喜雨」（杜甫）…東書①，「回鄉偶書」（賀知章）…筑摩①，「勸酒」（于武陵）三省③，「九月九日憶山東兄弟」（王維）…東書①，「山中與幽人對酌」（李白）大修③，「贈別」（杜牧）…筑摩，「贈汪倫」（李白）…東書①，「代悲白頭翁」（劉廷芝）…大修①，「竹里館」（王維）…東書②，「登樂遊原」（李商隱）…大修③，「芙蓉樓送辛漸」（王昌齡）…東書③，「臨洞庭」（孟浩然）…三省①

以上の採録一覧に加えて、詩人ごとの詩篇採録数をまとめてみると、李杜が八篇と七篇とで群を抜いていることが明白である。

八篇＝李白…静夜思・早發白帝城・黃鶴樓送孟浩然之廣陵・送友人・春夜洛城聞笛・望廬山瀑布・山中與幽人對酌・贈汪倫（以上、一人）

七篇＝杜甫…春望・絶句・月夜・登高・登岳陽樓・旅夜書懷・春夜喜雨（以上、一人）

三篇＝王維…送元二使安西・九月九日憶山東兄弟・竹里館（王維），杜牧…山行・江南春・贈別（以上、二人）

二篇＝孟浩然…春曉・臨洞庭，白居易…香炉峰下，新卜山居，草堂初成，偶題東壁・八月十五日夜，禁中獨直，對月憶元九（以上、二人）

一篇＝韋應物…秋夜寄丘二十二員外，于武陵…勸酒，王翰…涼州詞，王昌齡…芙蓉樓送辛漸，王之渙…登鸛鵲樓，賀知章…回鄉偶書，高駢…山亭夏日，張繼…楓橋夜泊，李商隱…登樂遊原，柳宗元…江雪，劉廷芝…代悲白頭翁（以上、十一人）

「国語総合」に限っての数字であるが、『全唐詩』に収載される唐代詩人は二千九百余人、詩篇は約五万首ともいう中で李杜を中心に十七人の詩人の三十六首の詩篇のみで構成されることは、学校教育の環境下とはいえ多少狭小な数字であるようにも思われる。

中学校教科書で全社に採用されることの確認された杜甫「春望」に翻ってみれば、そのいわゆる安定教材は、「国語総合」の九社中、六社十五種の教科書にも採用されることが明らかである。「春望」に高等学校で再会したとき、いかなる新たな学びが約束されるか、校種間の展開を意識した学びの獲得も大いに留意されるべき課題となろう。

**** 李白・杜甫と古文など

少なくとも中学校・高等学校の漢詩教材は、「李杜」を軸にして選詩されていることが明らかである。教育出版『伝え合う言葉 中国国語3』の「【李白と杜甫】」のコラムには、

李白と杜甫とは、ともに唐の時代を代表する詩人です。二人はほぼ同じ時代を生き、李白は杜甫よりも十一歳ほど年上で、親交もありました。

李白はものにとらわれない自由な性格で、詩でも想像力豊かな表現を用いることが多く、年若い自分の髪を「白髪三千丈」と表現したことで有名です。三千丈というのは約九千メートルにあたります。杜甫はそんな李白を尊敬していて、彼をたたえる詩を作っています。のように、杜甫の詩的特徴には特に言及しないものの、李白の特徴的な詩表現、ならびに杜甫の李白への敬愛と彼をたたえる詠作の存在に関してコメントする。

これは中学校の教材のみならず、高校の教材に発展し得る内容を含んでいる。高校の「国語総合」の教科書の中で、桐原書店の『国語総合』・『探求国語総合』（古典編漢文編）には、松浦友久「古典の魅力—現代からの視点」（『漢詩—美の在りか—』原載、2002年〔岩波新書〕）を採録する。李杜の交友交情に関わる新規の教材で、「漢詩」の主題には男性間の「友情」に関わる作品が多いとの詩的特徴の分析から、李白の「魯郡東石門送杜二甫」と杜甫の「春日憶李白」の二つの詩を通して、時間的・空間的な距離感を克服して埋めようとするかのごとき、二人の友情の呼応に言及している。

古典に接近し、その魅力を実感するには、自国文学の枠内に滞留せず、比較文化、比較文学的見地に立脚したマクロ的な視点を保持することも有効な手段となろう。結びの段落で「では「漢詩」の世界では、なぜ友情が強調されるのだろうか。」と問いかける。

それは、中国の三千年を超える変転極まりない王朝交替の歴史の中で、知識人がより安定した生涯を全うするためには、血族・同族に依拠した先天的・生理的な相互扶助のシステムだけでなく、友人・知人に依拠した後天的・社会的な相互扶助のシステムがきわめて重要だったからである。（下略）

日本の友情のありようを投影対比しつつ、中国の世界観を実感できる指摘であるが、その漢詩の読解の作業は日本という自国文化の理解の窓を開くことに通底する。「友情」に対する認識を持ちつつ、その中国的な特徴を比較文化的な視点からマクロに描き出し、その高い見地から発せられる考察の持つ意味は大いに示唆的である。漢詩という古典教材の学習をともなう近代以降の文章として、大いに啓発される思考を含んだ教材ということができる。

また、教材には、学習の動機づけと、展開する教材間の連携性が大切でもある。一人の人間が生きていく上での意味を考え、その人間形成の基底にある教養的な世界と将来的な展開、豊かな表現の世界を涵養することと連関する。学校図書「小学校国語六年上」の「漢詩を味わおう」では、

学校行事などの改まった場面のあいさつで、「歳月は人を待たず」というような中国の古典の一部を引用したりするのを耳にしたことはありませんか。

との学習者に対する問いかけからはじまり、「中国の古典は日本人の生活の中にとけこんでいます。特に漢詩の名句は、言葉の調子も良いため、しばしば使われています。」と展開させ、「胡隱君を尋ぬ」（高啓）の学習に結びつけている。古典学習の意義をいかに見出していくかは学習意欲を引き出すためにも重要である。その動機づけの重要さは校種を超えた命題でもあり、同じく学校図書「中学校国語3」の「4 今に向かって」「漢詩（漢文）」では、「春望」（杜甫）・「元二の安西に使ひするを送る」（王維）・「静夜の思ひ」（李白）の三篇により、詩の展開や情景・心情を読み取り、また繰り返し朗読することを試みているが、その導入の方法は特徴的で、そうした詩歌に日本人が出会い、それを受容し、あるいは影響を受けてきた事実を積極的にとらえた展開を企図している。

「国破れて山河あり」——平泉で藤原氏の滅びの後を前にした芭蕉の胸に、千年前の中国の詩、漢詩の一節が浮かびました。中国語と共に、漢詩も古い時代に日本に伝わりました。そのエキゾチックな響きやものの感じ方・捉え方に、当時の日本人は和歌にない新しさを感じたことでしょう。ここでは、中国の唐時代の詩人の作品から、芭蕉など私たちの祖先が出会い、その心をとらえ、影響を与えてきた三つの作品を読んでみましょう。

この導入の発展として、「漢詩が昔の日本人や古典作品に与えた影響」を確認するべく、「漢詩（漢文）」の後に「言葉が見た風景——おくのほそ道 松尾芭蕉」を用意して、「旅立ち」の後の「平泉」の章段では、「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」の字句に、次のような脚注をつけ、学習者の注意を喚起している。

漢詩『春望』（P210 参照）の一節を念頭に置く。

すでに記したように、中学校の漢詩教材では唯一杜甫の「春望」が五社採用の安定教材になっている。この事実によれば、学校図書のように中学校の古文の学習に連動させることが機能的であるように考えられる。ただ、鉄は熱いうちに打てとはいえ、古典学習の難しさを斟酌すれば、高等学校における有機的な発展教材とすることも有意義な道筋でもあろう。のみならず、『奥の細道』『旅立ち』の冒頭の「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。」は、李白の四六駢儷文として知られる「春夜宴桃李園序（春夜 桃李園に宴するの序）」の冒頭の「夫天地者万物之逆旅，光陰者月日之過客。（夫れ天地は万物の逆旅にして，光陰は月日の過客なり。）」に基づく。そして矢立ての句「行く春や鳥啼き魚の目は泪」の発想の根底には、「春望」頷聯の対句である「感時花濺淚，恨別鳥心驚」が働いているともいう。こうした中国古典の受容のありようにも発展させ、芭蕉の学問教養に遡って理解することも意義深い。古人の学びとその発露の位相を知るとは、現代の学習者の生きざまにも少なからず響くところがある。

しかも今般の東日本大震災の発生直後から幾多の人々が「国破れて山河在り」のフレーズを口にしていたか、その現実を重ねあわせ、古典の世界だけでなく、目下の実生活の中に古典受容の事例を検証することも重要である。これらの日本における受容の観点に立脚した編纂の姿勢、そして教授者によるフォローは、学習者にとって大いに有益であろう。

***** 震災下にあって

いわゆる「天地」は、我々の営みの場であり、そこに暮らす我々は天の恵み、大地の恵みをうけて、その自然への畏敬の念を抱きながら生きている。「天地玄黄」とは、梁の周興嗣の『千字文』⁷の冒頭の四句であり、「宇宙洪荒」と相俟って、我々を取り巻く空間をとらえた認識が示されている。

「天」は、人間が両手・両足をひろげて立った「大」の字の頭部を強調して示した指事文字。頭頂、いただきの意をあらわす。転じて、頭の上に高く広がる大空をもいう。「地」に対して、あめ、そら。万物を主宰する造物主を意味し、その天帝の命を受けて人間界をおさめるものを「天子」ともいう。

「地」の旁にある「也」は、平らにのびたサソリ、あるいはヘビを描いた象形文字で、音符として、うねうねと伸びる、ゆるむ意をあらわす。「土」とこの音符「也」から成る「地」は、平らかにのびた土地、のびやかに広がる大地の意となる。

『老子』七章にいう「天長地久」は、天は長く地は久しく、天地が永久に尽きないことを説く。「天に二日無し」は、天に二つの太陽が無い意で、国に二王（二人の君主）の無いことにたとえる。『礼記』曾子問や『孟子』万章上に「孔子曰く」として、「天に二日無く、土（民）に二王無し」とある。「楽天」は、天を楽しむ、境遇に安住する意。『易』繫辞上に「天を楽しむ命を知る、故に憂えず」、『孟子』梁恵王下に「天を楽しむ者は天下を保つ」とある。中唐の白居易の字でも知られる。「仰天」は、天を仰いで、嘆息や大笑をすること。日本では、転じてひどく驚く意。「地大物博」の四字熟語は、土地が広大で物産が豊富なこと。中国の人々が自国の風土を礼賛していることばである。『莊子』天道篇には、「天より神なるは莫く、地より富めるは莫し」と、天の霊妙さと地の富めることを対比的に説いている。

「天地人」、いわゆる三才のありようを知ることができるが、天災や人災による自然の破壊を被ったとき、天地の間に生きる人間は自らの無力さと自然への深い畏敬の念をとりわけ思う。すでに述べたように、2011年3月11日に発生した東日本大震災の足跡を振りかえるとき、発生直後から幾たび異口同音に発せられる「国破れて山河在り」のフレーズを耳にし、あるいは目にしたものか。その事例のほんの幾つかを活字の中に拾ってみよう。

「国破れて山河あり」の詩思はせて黄の福寿草 地震の地に咲く

「朝日新聞」（宮城全県）2011年4月27日所載の「みちのく歌壇」に見える桜井千恵子氏の詠作である。震災直下に花を付ける福寿草の黄色き花は、その災いを転ずるがごとき「福寿」の花名とも相俟って、印象的である。

あるいは、三年目を迎えるにあたって企画掲載された「〈日本国民を襲う「心の津波」〉新春対談作家・五木寛之×政治学者・姜尚中」（『週刊朝日』2013年1月13日）における五木寛之の発言に注目したい。

五木 実は私にとってあの被災地の光景は、歴史上の記憶として3度目の感覚なんですよ。一つは平安時代末期から鎌倉時代にかけての大きな政権交代の時期ですね。……2番目の記憶は、

13歳で迎えた敗戦です。あのときは「国破れて山河あり」という、そういう印象だったんですね。3番目が今度の東日本の大災害。ところが今度感じているのは、なぜか「山河破れて国あり」という感覚なんです。故郷の山、川、森、緑というものが汚染しつくされて、山河はまさに破れた、と。しかし、それにかかわらず透かして見えるのは、国家の力です。厳然とした支配構造の強化であるという印象が強いのですが、どうでしょうか。

歴史と自己体験に基づく感覚の表現のうちに杜甫の詩句が大いに機能している事実は、古典の受容という面からも注目に値する⁸。また、戦後ということであれば、「〈安野光雅 逢えてよかった：33〉小沢昭一 ハーモニカで客席を一杯にする達人」（「週刊朝日」2013年2月15日）には、「戦時中の状況を思い出す句もある。」と述べて、小沢昭一の1996（平成8）年11月の句作「荒鷺の飛ぶやあれから五十年」⁹を挙げるとともに、自らの句作を載せている。

国破れ山河は兵と草いきれ

まさに「国破山河在 城春草木深」の詩句と芭蕉の『奥の細道』『平泉』における「夏草や兵どもが夢の跡」を踏まえることは言うまでもない。

現代は、社会のあらゆる分野で総合的な知識が求められる「知識基盤社会」ともいわれる。この「知識基盤社会」ということばは、2005年1月の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」において、「二十一世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会（knowledge-based society）」の時代であると言われている」と述べられたのが国政関係の場で用いられた最初という。技術革新にともなう情報化、グローバル化が進む環境の中で、現代を単なる知識・技術だけでなく、それらを活用した思考力・表現力が、常に要求される社会であると認識することをも意味する。この二十一世紀の社会を生きるために必要な言語能力の育成も必須であり、その環境の中で、「常用漢字表」の改定、学習指導要領の改訂と相俟って、古典の中に占める漢文の教育が果たすべき役割もまた検証・考察されねばならない重要な課題である。

杜甫の生誕1300年を契機として小・中・高の国語科の古典漢文の教材を検討してみたが、上記のように、杜甫「春望」という一つの詩篇を通してさまざまな古典との語らいが紡ぎだされる。コンテンポラリーな古典受容の現実を目の当たりに見るとき、古典の古典たる意味を改めて思い知ることにもなろう。こうした何気ない事実をとらえることを通して、教育の現場における古典教育のあり方を広く見直すことも肝要であろうと考える。杜甫の「春望」を介しての文学的往還は、近代の訳詩を含めた重層化も可能である¹⁰。本論考は、こうした日常を意識した教材学習考察の第一歩として提出するものである。

【注】

- 1 『小学校学習指導要領解説国語編』（2008年6月）第3章「各学年の目標と内容」第3節「第5学年及び第6学年」の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕においては、対象となる「古文や漢文、近代以降

の文語調の文章」に関して、「この内容は、中学校第1学年「(ア) 文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。」へとつながっていくものである。」と、中学校への接続・展開性を明示している。

- 2 「日本語の響きやリズムを楽しもう」で扱う『論語』の章段の数のみを記す。〔一年〕二章, 〔二年〕一章, 〔三年〕三章, 〔四年〕二章, 〔五年〕四章, 〔六年〕四章。
- 3 『中学校学習指導要領解説国語編』（2008年6月）第2章3「国語科改訂の要点」（5）「伝統的な言語文化に関する指導の重視」においては、「例えば、第1学年では文語のきまりや訓読の仕方を知って音読すること、第2学年では古典に表れたものの見方や考え方に触れること、第3学年では歴史的背景などに注意して古典を読むことなどを取り上げている。」とポイントを示している。
- 4 丁秋娜「日本と中国における「漢文教育」の比較研究—杜甫の「春望」の場合—」（『学術研究（国語・国文学編）』第五十七号、早稲田大学教育学部、2009年2月刊）は、今次の学習指導要領の改訂を視野に入れ、日中共通教材の比較考察の観点から「春望」をとらえる。しかし、日本の中学校教科書は旧課程の2006年度版に依拠したものであった。なお、「春望」については「光村図書以外全社に取り上げられている。」と指摘する。
- 5 『高等学校学習指導要領解説国語編』（2009年12月）第1章「総説」第1節「改訂の趣旨」3「国語科改訂の要点」（8）「各科目の要点」ア「国語総合」に関しては、その四点目の中に、「読むことの指導のうち、古典と近代以降の文章との授業の割合は、おおむね同等とすることを目安として、生徒の実態に応じて適切に定めるようにしている。古典における古文と漢文との割合は、一方に偏らないようにしている。古典の教材には、古典に関連する近代以降の文章を含めることを明示している。」（傍線筆者）と述べる。
- 6 各出版社のHPに掲載される教科書の目次等による。
- 7 『千字文』の書名は、和邇吉師による漢籍の将来を記した『古事記』の記載に『論語』と並んで認められる。
- 8 2013年3月16日「朝日新聞」（山形）が報じる「TPP交渉参加表明 県内も大きな衝撃 JAは自民へ反発」の記事には、杜甫の詩句を踏まえた次の発言が認められる。
山形は全国有数の農業県。交渉参加に反応は複雑だ。
JA山形中央会の長沢豊会長は「十分な情報開示と国民的な議論がない。誠に遺憾で、強く抗議する。環境・文化と地方経済を守ろうとする多くの国民の強い思いを無視するものだ。『国破れて山河なし』では済まされない」と安倍政権を批判する談話を発表した。
- 9 『俳句で綴る変哲半生記』（2012年12月、岩波書店刊）の「小沢昭一句集」所収。
- 10 土岐善磨は『新訳杜甫詩選』第1巻（1955（昭和30）年11月、春秋社刊）あるいは『新訳杜甫』（1970（昭和50）年3月、光風社書店刊）に、次のように訳している。

国破れて	山河はあり	国破山河在
春なれや	城辺のみどり	城春草木深
花みれば	涙しとどに	感時花溅淚
鳥きけば	こころおどろく	恨別鳥心驚
のろしの火	三月たえせず	烽火連三月
千重に恋し	ふるさとの書	家書抵萬金
しら髪は	いよよ短く	白頭搔更短
かざしさえ	さしもかねつる	渾欲不勝簪